



ほうさ 第12号

1982年9月

名古屋市蓬左文庫

Nagoyashi Hōsabunko

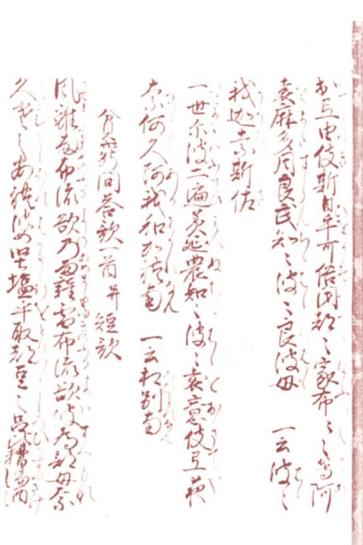
# 展示風 より

## 和歌文学書展

9.4(土)～10.24(日)

「万葉集」は現存最古の和歌集で、その成立は760年前後とされるが、歌の採集は早く8世紀の初め頃から始まっていたといわれる。収録された歌は、仁徳天皇の時代(4世紀頃)から大伴家持(759年詠歌)まで、約4500首にのぼり、その数の多さには目をみはるが、その作者群をみても、貴族から庶民、首都から地方農村の人々までを含んでおり、民族的共感の上に成立した一大歌集ということができる。質についても、古代の文化遺産として、他民族のものと比べても遜色のないすぐれた大歌集であるといえる。

この「万葉集」が生まれる前には、長い口誦歌謡の時代があった。素朴な感動の叫びが、舞踊を伴う集団の歌となり、これが一定の音律をそなえるようになって「和歌」へと発展していった。



## 平仮名本「万葉集」

「和(倭)歌」は、「漢詩」を意識して使われた用語で、次第に「漢詩」の影響を受けながら、日本独自の文学表現が「和歌」として展開されていったのである。

奈良時代になって古代国家の組織が整い、中国との通交も盛んになり、漢字を用いての国語表記（万葉仮名）が考案されると、民族的・集団的な口誦歌謡は、文字による記載文学に飛躍し、個人の文学的意識による創作活動の気運が高まっていった。

こうした情勢のもとに「万葉集」が生まれてきたのであるが、歌人たちの個性のゆたかさもさることながら、古代律令制が創られてゆく過程での支配者たち（天智・天武・聖武天皇など）から、辺地の被支配者層（東歌・防人歌の作者たち）までが、同じ歌集に作品を並べているのは、この歌集の大きな特徴のひとつである。すなわち「万葉集」の世界が、そのまま古代社会的一面を髣髴させるために、単なる文学作品にとどまらない魅力を持って、今も我々に強く語りかけるのであろうと思う。

さて、「万葉集」が、大和を都とした奈良時代の文化遺産であるとするならば、次に続く「古今和歌集」「新古今和歌集」は山城を中枢とする平安時代の産物であり、おのずからその特徴を異にする。一般に、「万葉集」が男性的・直截的と評されるのに対し、「古今集」は女性的かつ観念的・技巧的、「新古今集」は幽玄で象徴的であると評されている。この代表的な三歌集の優劣については、よく論じられるところであるが、その特徴の違いは、そのまま民族の成長の違いであり、その各段階での特色を示していくと解すれば、それぞれに興味深いものであろう。特にわが国のように、和歌文学が生活の中に深く根をおろしてきた国では、なおさらのことといえよう。

今回の展示には、本文庫の蔵書中、今あげた三歌集はもとより、勅撰集、私撰集、有名歌人の家集、歌学・作法書から歌物語まで、古代・中世を主とし、注釈書も含めると近世にわたるものまで50種を選んだ。いずれも豊かな特色と個性を備えているが、その母胎となった歴史的背景をふまえた上でご鑑賞ねがえれば幸いである。

#### 勅撰和歌集一覧 ( )は成立年代。( )は推定成立年代。

三代集……古今和歌集(905) 後拾遺和歌集(951)

拾遺和歌集(1005)

八代集……三代集の他、後拾遺和歌集(1086)

金葉和歌集(1127) 詞花和歌集(1151)

千載和歌集(1187) 新古今和歌集(1205)

十三代集……新勅撰和歌集(1235) 続後撰和歌集(1251)

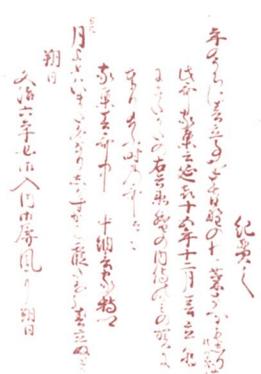
統古今和歌集(1265) 統拾遺和歌集(1278) 新後撰和歌集(1303)

玉葉和歌集(1312) 統千載和歌集(1313)

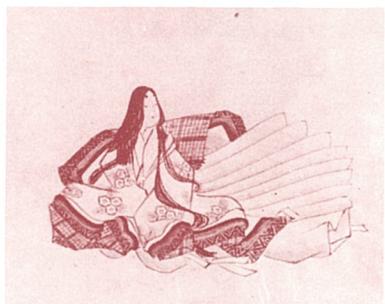
20) 続後拾遺和歌集(1326) 風雅和歌集(1349) 新千載和歌集(1359)

新拾遺和歌集(1364) 新後拾遺和歌集(1384) 新統古今和歌集(1439)

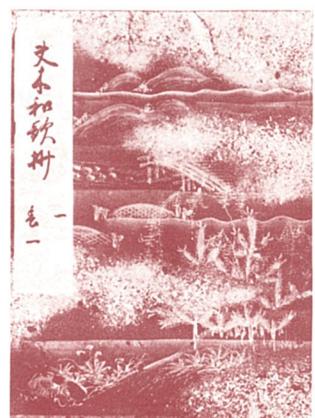
二十一代集…八代集と十三代集の総称



「三十六人家集」の内



「同」 小大君



「夫木和歌抄」

# 「和歌文学書展」出品目録

## I. 勅撰集 (★を付したものは注釈書等)

1. 古今和歌集 紀貫之等編 室町時代写  
20巻1冊
2. 古今和歌集(卷11~20) 同 同  
貞応本(嘉禄本校訂) 10巻1冊
3. 古今和歌集抄 飛鳥井雅親 江戸初期写  
20巻5冊★
4. 古今和歌集聞書 积 宗祇 室町時代写  
駿河御譲本 2冊★
5. 拾遺和歌集 文明2年写(東常縁奥書)  
20巻1冊
6. 金葉和歌集 源俊頼編 江戸初期写 10巻1冊
7. 詞花和歌集 藤原顯輔編 慶長7年写  
田安家田藏 10巻1冊
8. 新古今和歌集 藤原定家等編 室町時代写  
20巻2冊
9. 美濃の家づと 本居宣長 刊 5巻5冊★
10. 八代集 江戸中期写 140巻14冊
11. 八代集秀逸 藤原定家編  
江戸初期写(伝中山忠尹筆) 1冊★
12. 二十一代集 江戸中期写 400巻48冊

## II. 私撰集

13. 万葉集 江戸初期写 平仮名附訓本 20巻20冊
14. 万葉集 江戸初期写 片仮名附訓本  
(題簽徳川光友筆) 20巻20冊
15. 万葉集 桂本複製 昭和3年刊(尚古会) 1軸
16. 万葉集註积[万葉集抄] 积 仙覚  
江戸初期写(寛永13年堀杏庵識語)  
「御本」印記 10巻10冊★
17. 万葉新採百首解 賀茂真淵  
江戸末期写 3巻3冊★
18. 万葉集略解 橘 千蔭 江戸末期刊 20巻30冊★
19. 三十六人家集 藤原公任編 江戸初期写  
36巻36冊
20. 三十六人集(いせ・つらゆき下)  
西本願寺本複製 昭和8年刊 2冊
21. 源氏物語和歌集 写[江戸] 1冊
22. 百人一首 藤原定家編 江戸中期写 1冊
23. 百人一首拾穂抄 北村季吟 江戸中期刊  
2巻4冊★
24. 風葉和歌集 江戸中期写 18巻4冊
25. 夫木和歌抄 藤原(勝間田)長清編  
江戸初期写 36巻・目1巻 37冊
26. 自讃歌 室町時代写 1冊

27. 類題和歌集 後水尾天皇編 江戸中期写 6冊

## III. 家 集

28. 遠島百首 後鳥羽天皇 江戸初期写 1冊
29. 源重之家集 尾張徳川黎明会本複製 刊(昭和) 1冊
30. 山家和歌集 积 西行 江戸中期刊  
〔六家集之内〕2巻
31. 拾遺愚草 藤原定家 室町時代写 2巻2冊
32. 鷹百首和歌 西園寺公経 江戸初期写 1軸
33. 金槐和歌集 源 実朝著  
寛政6年写(堀田知之筆) 1冊
34. 俊成卿女歌集 江戸中期写 1冊
35. 壬生二品集[壬二集] 藤原家隆  
永正14年写 2冊
36. 名所三百首 順徳天皇・藤原定家・藤原家隆  
永禄10年写 1冊
37. 三玉集 江戸初期写 34巻5冊  
柏玉集(後柏原天皇)雪玉集(三条西実隆)  
碧玉集(冷泉政為)

## IV. 歌学・作法

38. 和歌十体 藤原定家 江戸初期写  
種村肖推寺献本 1冊
39. 詠歌大概 藤原定家  
寛永8年写(良恕親王筆) 1冊
40. 無名抄 鴨長明 永正12年写 2冊
41. 八雲御抄 順徳天皇 室町時代写  
6巻(巻6欠)5冊
42. 和歌庭訓 藤原為世 江戸中期写 1冊
43. 井蛙抄 积 賴阿 慶安元年刊(補写あり)  
6巻2冊
44. 松緑集 积 堯慶 永正4年写(自筆本) 1冊
45. 愚問賢注 二条良基 慶長年間写  
種村肖推寺献本 1冊
46. 増補 和歌題林抄 一条兼良 安永6年刊  
3巻5冊
47. 耳底記 細川藤孝(幽斎) 寛文元年刊  
3巻2冊
48. 戴恩記[歌林雜話集] 松永貞徳  
江戸末期写(元禄15年刊本複写) 2巻2冊

## V. 歌物語

49. 伊勢物語 定家本 室町時代写(伝九条忠榮筆)  
1冊
50. 大倭物語 明応5年写 「御本」印記 2冊

## 蓬左文庫の蔵書印

その10. 「徳川氏蔵書記」  
「徳川氏図書記」

織 茂 三 郎

本文庫の蔵書印については、ほぼ年代順に1, 2種ずつ紹介してきたが、なお2, 3回続けるつもりである。10回目にあたる本号では「徳川氏蔵書記」と「徳川氏図書記」の両者が登場するが、前者はタテ52mm、ヨコ36mmの蠟石製（徳川美術館現蔵）で、ほかにも類似の印（黄楊製）がある。後者はタテ64mm、ヨコ39mmの長方形（材質未詳）で、印面の四隅に「尾張」の2字を二か所ずつ配置した装飾的な印となっている。両印いずれも、「徳川氏」の3字が刻まれているのは、明治2年(1869)の版籍奉還によって尾張藩が廃された以後の作成にかかることを示している。

本文庫は、初代義直のころまでは、その個人的な所蔵であったが、二世光友の万治元年(1658)に書物奉行の職制が設けられて公的な性格を帯びるにいたった。とはいえ、公私の別は必ずしも明確でなく、旧藩時代に編集された諸目録にも、「源敬様(義直)御書物」「瑞竜院様(光友)御書物」「泰心院様(三世綱誠)御書物」などと私物的に取り扱われた例もすくなく、現在でも、尾州家本「続日本紀」同「源氏物語」など、旧称のまま通用している。

それはとにかく、明治維新後は、文庫はふたたび徳川家の私有に帰したので、蔵書印には改めてそれを明示する必要を生じ、新たに数種の印が作成された。「尾張」という文字を加えたのは、いうまでもなく他の徳川家と区別するためである。したがって、これらは原則的には明治以後の蔵書に用いられたということになるが、それ以前の書籍にも、後から捺印された例が皆無とはいはず、蔵書印の製作年代と書籍の成立、もしくは入庫の年代とが、つねに一致するとは限らない。

なお、本文庫の蔵書は、明治5年(1872)、その一部が売り払われたが、徳川家の新邸が成るに及んで、また次第に増加し、一度散逸した旧蔵書が買いもどされたこともたびたびあり、総数においては、戦後の寄贈本等は別にしても、現在の方がかなり上まわっている。

(蓬左文庫調査研究員)



「徳川氏蔵書記」印



「徳川氏図書記」印

## 「名古屋叢書三編」次回配本のお知らせ

第19巻 物品識名・物品識名拾遺・本草会物品目録・泰西本草名疏

(第4回配本、11月頒布予定、3,000円)

江戸後期における尾張本草学の水準の高さを示す資料四種を、影印により紹介します。「物品識名」「同拾遺」は、尾張を代表する本草学者水谷豊文の著作、「本草会物品目録」は、豊文を追悼して天保6年に嘗百社の開催した本草会の出品図録、「泰西本草名疏」は、わが国理学博士第1号。海外にもその名を知られた伊藤圭介が、初めてリンネの植物二十四綱分類をわが国に紹介した名著です。底本は、いずれも蓬左文庫蔵の刊本ですが、「本草会物品目録」「泰西本草名疏」は特製本(尾張藩への献上本)で、挿図の部分には見事な手彩がほどこされています。それをそのまま伝えるため、すべてカラー印刷としました。

蓬左文庫には、次にあげる三種の家わけ文書があり、それぞれ別置の上、整理されている。いずれも「名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録」(昭和51年刊)に収録されて詳しいが、今回は、この三つの資料群をとりあげて紹介しようと思う。ひとつは近世特権商人の家に伝わった資料、ひとつは土豪的な性格の強い旗本の、残るひとつは地位の高い公卿貴族のものであり、それぞれ特色豊かな資料群である。

#### 〈尾州茶屋文書〉

尾州茶屋家(中島氏)は、角倉・後藤の両家とともに幕府御用の三家衆として活躍した京都の豪商茶屋四郎次郎家の分家で、同じく茶屋清延(1545~96)を祖としている。清延は永禄の頃から徳川家康に仕えて、物資の調達や情報の収集に活躍し、その後海外貿易を許されて東南アジアとの交易によって巨富を築いた。この清延の三男新四郎長吉が、慶長19年(1614)、分家して尾州家に仕えたのが尾州茶屋家のはじまりである。尾州茶屋家は、代々茶屋町(現中区丸の内二丁目、町名は屋号に由来する)に住し、呉服所経営と朱印船貿易をその業としたが、鎖国後は貿易を廃され、京都の本家(茶屋四郎次郎家)とともに幕府呉服師を拝命し、かつ尾張藩の呉服用達にもたずさわる一方、士分に類した近侍御用をも勤めた。江戸初期における門閥的特権商人の中でも別格の存在といえる。新田の開発もさかんに行い、茶屋新田(寛文3年)、茶屋後新田(延宝7年)などが知られるが、後者の開発の際には経営に失敗し、家運を傾けている。また、呉服所営業も江戸中期以降はふるわず、新興の商家にその地位を奪われた。

本文庫の〈尾州茶屋文書〉は、一応文書と総称しているが、由緒書、日記、雑記録、新田関係資料、それに若干の書籍・絵図などから成り、総数は124件136点、昭和43年に当主の故中島建次郎氏から寄贈された。

#### 〈美濃高木家文書〉

美濃高木家は、もと美濃国駒野・今尾地方の豪族で、のち徳川家康の旗本(交代寄合、柳之間詰、美濃衆)として知行高4千300石を与えられ、美濃国時・多良(現養老郡上石津町)を領し、常住して同所24ヶ村の村方を支配する一方、木曾三川の治水という特殊任務にたずさわっていた。(一般に、旗本は江戸に常駐するのが原則であるが、高木家の場合は、その知行地が東海・東山両道を結ぶ軍事的要地にあったことと、特殊任務に就いていた等の理由で別格の扱いを受けた。)

高木家は、西・東・北の三家から成り、美濃高木三人衆などと称され、それぞれ自立した旗本であったが、参勤・治水などには三家年番で当り、その点では三家一体であった。高木三家は、本家である西家を除き、明治初年に没落したが、本文庫に現蔵の資料は、この内の東高木家に属するものである。

東高木家は、西高木家の祖、貞利の弟、貞友を祖とし、知行高は1千石、領地は多良郷の宮村をはじめ5ヶ村、時郷の下村はじめ6ヶ村で、その他、西・北二家と相給で領している村もあった。

高木三家の文書は、少くとも江戸末期までは、各家において集積保存されていたであろうが、明治以後も存続した西家の分は、戦後、市場に流出し始めたのを、名古屋大学が散佚を惜しみ7万7千点を購入し、現在、目録を刊行中で(「高木家文書目録」巻1~4既刊)、質・量ともにもっともよくまとまっている。早くに没落した東・北両家の分は、どのように処分されたのか明らかでないが、本文庫の東家分は、昭和初年、徳川林政史研究所が、東京の某書店から購入したもので、その一部を除き、大部分は本文庫に引き継がれている。総数1623件2649点(2件が合綴されているものは2点に数えた。それ以上も同じ)、慶長14年の「多良村御繩打水帳」(検地帳)を最古として、明治初年に至るまでの文書・記録・地図などが含まれている。

その他、各所に高木家文書が伝わっているが、それについては、やはり名古屋大学発行の「高木家文書調査報告」I~VII(1972~79)等に詳しいので参照されたい。

#### 〈大炊御門家文書〉

大炊御門家は、平安後期の閔白・藤原師実の第三子経実に始まり、代々清華家(五摂家に次ぎ、大臣・大將となり得る家柄)として勢力をふるった。二条天皇や後土御門天皇は、同家の外孫である。江戸時代には家領200石、のち400石に加増され、書道・和琴・笛・装束などをつかさどった。家名の「大炊御門」は、経実の第四子経宗(1119~89)が、大炊御門の北に住んだことから始まっている。

〈大炊御門家文書〉は、同家旧蔵の有職・故実に関する文書・記録・典籍類394件1,100点で、康正3年(1457)の写本「節会行類抄」を除けば、ほとんどが江戸時代の写本である。昭和24年、当主の大炊御門経輝氏(元徳川生物学研究所員・理学博士、徳川義親氏の女婿)から寄贈された。

# 出版物一覧

名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録( S .50年刊)	3,500円	日本の古典<蓬左文庫図録>( S .52年刊)	200円
名古屋市蓬左文庫国書分類目録( S .51年刊)	4,000円	蓬左文庫・源氏物語図録( S .53年刊)	300円
名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録( S .51年刊)	2,500円	蓬左文庫所蔵古地図複製( S .55~57年刊)	
尾崎久弥コレクション目録第一~三集 ( S .52~55年刊)	各 1,500円	No. 1 ~ No. 10	各 1,800円
名古屋叢書(正編)索引・総目録( S .53年刊)	2,000円	No. 11(尾張志付図)丹羽郡	1,800円
名古屋叢書続編 索引( S .47年刊)	700円	名古屋叢書三編第12巻( S .56年刊)	3,000円
名古屋叢書続編総目録( S .44年刊)	400円	同 第8巻( S .57年刊)	
善本解題図録第一~三集( S .55年再版)	各 300円	張州年中行事鈔他二編	3,000円
蓬左文庫重要文化財図録( S .52年刊)	200円	同 第16巻( S .57年刊)	
		横井也有全集上	3,000円

★以上の出版物は、本文庫事務室において頒布しています。郵送希望の方は郵送料が必要ですので、お問い合わせ下さい。(ただし、古地図複製は郵送不可)

★本文庫所蔵古地図の精密な複製を作成し、希望者には頒布しています。

★「名古屋叢書三編」(20巻・付1巻予定)の第1~3回配本を頒布中です。次回配本(第19巻、物品識名他)は、11月頃頒布の予定で準備を進めています。

## ▷▷▷ 利用ご案内 ◇◇◇

▷開館時間 午前9時30分~午後5時

▷休館日 每月曜日・第3金曜日(館内整理日)

祝日 (日曜に重なる場合は日曜開館、月・火休館)  
月曜 " 月・火休館

▷閲覧 館内に限り、館外貸し出しありません  
(閲覧料) 普通図書 無料

重要図書 有料(1部100円)

▷展示 常時蔵書の一部を展示  
(特別展を除き入場無料)

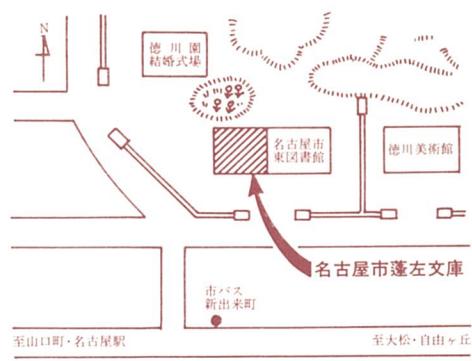
▷複写サービス 普通図書のうち保存上影響のないものについて複写サービスを行ないません。その他、マイクロフィルムの利用、写真撮影の申請を受付けますので、ご来庫の上、ご相談下さい。

## 名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町1001番地

☎(052)935-2173

(市バス 新出来町 北 100m  
山口町 東 500m)



「蓬左」第12号 ☆昭和57年9月4日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)

☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：大同印刷(東区泉2-3-18)